The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大久保昌一名誉教授に聞く ： 大阪大学の思い出
Author(s)	中尾, 敏充; 菅, 真城; 阿部, 武司
Citation	大阪大学経済学. 2009, 59(3), p. 357-382
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26561
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【資料】

大久保昌一[†]名誉教授に聞く

－大阪大学の思い出－

中 尾 敏 充[‡]・菅　　真 城[‡‡]・阿 部 武 司[‡‡]

2008年１月16日
於　大久保名誉教授宅
（大阪府箕面市）

大阪大学法学部に配置換え

中尾　では今日は，大阪大学法学部名誉教授であられます大久保先生に，教育研究あるいは社会貢献など大阪大学でいろいろとご活躍されましたお話をお聞きしたいと思います。

それでは早速ですけれども，事前に質問事項を提出させていただいていますので，それに沿ってお聞きしたいと思います。大久保先生は阪大の工学部をご卒業されまして，助教授まで工学部におられたわけですが，昭和51（1976）年に行政学講座教授として法学部へ配置換えされます。このへんのことも含めてお話しいただければと思います。その際，先生自身のご専門の研究分野などについてもお話しいただければと思います。

では先生，よろしくお願いいたします。

大久保　当時，法学部に都市問題研究所のようなものをつくりたいという構想を持っておられたようなんですね。ですから，都市問題研究所の所員として，阪大工学部の環境工学科にいた僕に来いという要請をいただきました。ご承知のように，大学の人事というのは当該学部の教授会がおこなうものですから，私の発意では勿論ありません。

それで，ある日突如，法学部長と評議員の方がお二人，工学部の私の研究室へおみえになりまして，いまのような要請を受けました。僕は法律学の素養がないし，どうしたものかなと思いましたけれども，何かニュアンスとしては都市問題研究所のようなものをおつくりになるということで，それでは寄せていただこうかと移ったわけです。

行政学講座というのは，それとの関連で人事を決定したような。だからこれは私の推測ですが，行政学講座プロパーで私が招かれたというわけではなかったと思います。しかも私としては，仮に行政学ということであっても務まるのかなというような不安がありました。

しかし，その行政学というコンセプトは，言うなれば，フェルバルトゥング（Verwaltung）に関するヴィッセンシャフト（Wissenschaft）という一つの科学なんだと考えるか，一つの実践的な理論をつくりあげること，そういう行政論というか，そのようなニュアンスの広がりがあると思うのです。ですから，ポリティカル・サイエンスの一分野というような堅苦しい感じではなく，広く行政問題について考えるという

† 大阪大学名誉教授
‡ 大阪大学大学院法学研究科教授
‡ 大阪大学文書館設置準備室講師
‡ 大阪大学大学院経済学研究科教授

ような意味合いで，一つ自分自身のすみかをつくってみようかなという認識に到達したというか。

しかもご承知のように，私は空間計画をずっとやってきており，阪大工学部の大学院から日本住宅公団に移って，ひたすらフィジカルなマスタープランを専門にしてきたわけです。当時，新聞には「東洋一のニュータウン」という見出しで，香里のニュータウンの紹介がありました。その香里ニュータウン，実態は香里団地，２住区で人口２万人ですから，ニュータウンではないと思いますが，そういう住宅団地でも，幼稚園から小学校，中学校と必要な施設はすべて整備されていないといけないし，インフラストラクチャーも全部必要なわけです。そのような２住区の計画人口２万人という小団地から出発したけれど新都市づくりのベースはできたと。だから，この経験を踏まえれば12住区であっても，つまりニュータウンであってもできるということで公団としては千里ニュータウンの開発に着手せんとしたわけです。

ところが，千里ニュータウンは大阪府がやりたいということで，われわれに任せてくれと言う。やはり大阪府は行政権を持っていますから用地買収に関して有利だということで，任せるからやってくれと。そのかわり，大阪府は公営住宅を数棟建てた経験しかないので，マスタープランやレイアウトはわれわれに任せろということで，すったもんだしたのですが。

そのとき私は住宅公団で最下級の役人というか，半役人だったわけですね。つまり大学を出てきたら技師補で，まだ技師ではない。その技師補が，技術分野では大阪府の一番偉い人である建築部長と国際ホテルでマスタープランの構成やレイアウトのプリンシブルについて，じかに議論し合うわけです。そんな，むちゃくちゃなことをやった。

そういうふうに千里ニュータウンの問題と深くかかわったということと，それからさらに，いま学研都市の平城クラスターとなっております人口８万人の平城ニュータウンのマスタープランも私がやったわけです。初代の計画課長として，そこへ乗り込んでいった。また，大阪大学の吹田キャンパスの計画にもタッチさせてもらいました。そして私はマスタープランの考え方を『建築文化』という雑誌に書いたのですけれども，それが業界に目を引いてくださって工学部建築学科の足立研究室が建設業界賞をもらい，香里では公団が土木学会賞をもらいました。

そういうことと並行して，「地方自治法」の改正で市町村は基本計画を立てなければならなくなり，その基本計画をどうするかということについて，兵庫県の加東郡社町長の依頼で指導をしてきました。また，兵庫県のニュータウン計画についても指導してくれということで，県の企画参事室の指導員というかたちでやってきました。

例えば，加東郡では「嬉野学園都市」という計画。ここへは国立兵庫教育大学を誘致し，42ヘクタールぐらいのサイエンスパークもつくりました。富士通のコンピュータ関連機器をつくる工場とかね。

やはり私は，大学というのは地域社会と密接な関係を持つ必要があると。アメリカでは大学のコミュニティー・リレベーションズということが盛んに言われておりますが，日本の大学は，例えば俺のところは国立大学だから大阪に立地していても大阪とはあまり関係がないと。そういうローカルな仕事ではなく，ナショナルな全国的なことをやるんだ，いわゆるワールド・ワイドのことをやるんだと言って，恩になっている地元社会に対する成果の還元というか，そういうことをおろそかにしていたと思います。

僕はそういうことにならないように，兵庫県の国立兵庫教育大学では社町に大学機能をエクステンションしてほしいと。そういうことで，おそらく国立大学のなかで最も公開講座が多い大学ではないかなと思います。ですから，国立

兵庫教育大学は僕の言うことを非常によく聞いてくれました。それから兵庫県や社町がやっているいろいろな計画に対する審議会にしても，役員になって指導してほしいとか。

また町の側も，例えば「花と緑の会」というようなボランタリーな団体がキャンパスへ行って雑草を取ったり，ギブ・アンド・テークの関係をつくりあげる。ですから，学校側も非常に喜びましたね。常にきれいに，ちり一つない，雑草一つないというような。大阪大学はそうなっていますか。吹田の人たち，あるいは豊中の人たちは掃除に来てくれますか。そういうことで，大学と地元社会とのむつまじい協力関係というか，それが重要であると。

それからもう一つは，例えば立地した企業も，単にそこで生産活動をやる，あるいは研究開発をやるというだけではなくて，わが社はどういうことで社会的に寄与してきたかという，いわゆる博物館的な機能を全面に出すようにしてもらった。玄関周辺に開発機器を置き，昭和初年代はブラウン管だったけれども，いまは超高度集積チップで非常に精密な機器をつくっているのですと。そういう小博物館的な展開を提案し，それはすべて実現していただいているということです。

そういうことで法学部からお声がかかったときには，先ほども言いましたようにサイエンス・アドミニストレーティヴ（science administrative）か，ポリティカル・サイエンスというような高い立場ではないけれども，実践経験のなかから得た経験的知識を理論化する方向で補填対応ができるのではないかということで，腰を落ち着かせていただいたわけです。

もう一つ申しあげますと，その場合に，やはりモデルが必要なので，私としてはイギリスを一つのモデルにしました。なぜかと言いますと，ご承知のように都市問題というのは都市ができてから発生した。つまりB.C.3500年頃スタートした人類の都市革命以後，都市問題というのは継続してあったと思います。しかし，現在のわれわれが経験している都市問題というのは，そういうものではなくて，産業革命以降の都市問題という特殊な形態・性質の問題であると考えたわけです。

そうしますと，産業革命を世界で最初に出発進行させたイギリスこそが，最も近代・現代都市問題に長い経験を持ち，他の国々よりも長く苦しんで，長く制度的対応を工夫してきた。したがって，われわれは先達として，フォアランナーとして，そのモデルをやはりイギリスに求めるべきだと，ドイツやフランスやアメリカではないと。そういうことで，私はイギリスモデルをイメージしながら勉強させてもらったのです。

お答えになっているかどうかわかりませんけれども，最初の問題は，だいたい以上でございます。

工学部と法学部との差異

中尾　いまのお話をお聞きしていますと，最初は都市問題研究所の構想があって，それと同時に先生は空間計画というものがご専門ということで，マスタープランづくりなどを中心になされていて，それを当時のいろいろなニュータウンの計画に生かしておられたと。そういう点で，さまざまな新しい都市づくりに関与されていた，それを各自治体にも要請されて対応されていた。

そこに突然，法学部長と評議員の方が行政学講座への要請をされたと。そこで法学部では，どういう行政学を教えていくかということで，実践計画のなかから生み出された都市問題を基本に置いて，新しい行政学を構想されていくというお話であったかと思います。

そうしますと，いままで工学部のほうで学生や院生を指導されて，大阪大学という共通性はあるにしても，通常，理系の学生と文系の学生

ではいろんな違いがあるかと思います。講義などを通じて，最初に工学部で教えられた場合と，法学部に配置換えされてから法学部の学生，あるいは院生を指導する際に，何か戸惑いとか違いとか，共通性もあると思うのですが，そのへんのことやあるいは，教授会の雰囲気などもだいぶ違っていたのではないかと思われるのですが，法学部の先生方の研究スタイルと，工学部から来られた先生の研究スタイルとか，そういうことも含めて，その当時，何かお感じになったようなことがありましたらお話しいただきたいと思います。

大久保　私は常に比較的な視点で考えていたわけではもちろんありませんので，我流にひたすら邁進するというような一方的なエゴイストであったわけですが，むしろ私は教えるというより，法学部へ移っていろいろ教わったと思うのです。そのことについては，私は非常に幸せであったと思います。

どういうふうに教わったのかと言いますと，工学部では，こんなことを発明したとか，こういう実験でこういう成果を得たというような研究のアウトプットが重視されますね。当然の話だと思いますが。しかし法学部の場合は，アウトプットだけではなくそういうアウトプットを手にしたプロセスが同時に問題にされるということ。言うなれば“due process of law”。この考え方を私は非常に教わったのです。われわれはいい結果を手にするだけではなく，いかに民主的で正当なプロセスに基づいて手にしたかという，むしろ，そういうプロセスを重視すべきだという考え方を教わったと思います。

したがって当時，計画と言えば，マスタープランというプランですね。ところが，それは結果であって，どうしてそのようなプランができたのかというプランニングプロセスを，むしろ重視すべきではないかと。つまり，プラン（plan）にジェランド（gerund）で“ing”と書きますとプランニング（planning）ですね。ですから，プランよりプランニングのほうが重要だという認識を得ることができたと私は思うのです。つまり，アウトプットとしてのplanよりも，planを生み出すプロセスとしてのplanningが大切である。しかもplanningはシンプルな技術的過程オンリーではなく，３つの過程，即ち，科学技術的過程・人間的過程・政治的過程の複合的過程であり，モノディシプリナリー・アプローチではなく，インターディシプリナリー・アプローチが必要である。そのプロセスを，より科学的に（more scientific），より人間的に（more humane），より民主的に（more democratic）にすることが不可欠であると，planningについての認識を深めることが出来ました。そういう意味で，私は法学部に対しては何らなすべきことがなかったようですけれども，法学部から非常に教わったと思います。

それから学生諸君との関係に関しましては，法学部の先生方は全教官，いわゆるゼミ，研修に参加されたと。これは非常によかったと思います。やはり教育というのは単なる情報のやりとりではなくて，人間的触れ合いというか，それが極めて重要だと思うのです。そういう意味で，法学部のゼミというのは教官とのパーソナルな触れ合い，コンタクトによって，知識以上のものを獲得することができる。そう感じました。

しかし，もう少し欲を言えば，卒論がなかったというのが工学部との違いなのです。ですから，卒論がある，ないということと，ゼミへの力の入れようというか，これらの学生のスタンスが少し違っているような感じがしました。何かそういう勉強のスタンスの差がちょっと問題ではないだろうかと。

1968年でしたか，イギリスの労働党のウィルソンが首相のときに，オープン・ユニバーシティーというのをつくりました。ロンドンから北80キロぐらいのところに，ミルトンケインズという人口25万人の立派なニュータウンがある

のですが，そのニュータウンのなかにオープン・ユニバーシティーをつくったのです。

イギリスでは“education on the air”というふれ込みでしたが，放送大学の欠陥というのは，先ほど言いましたように，教師と学生との人間的触れ合いの場所がないのですね。単なる情報として電波に乗るだけ，テレビに乗るだけ。そこで一定期間，短期間しかないのですが，スクーリングのタームを取りまして，泊まり込みで先生とじかに接触する機会をつくっています。しかし，それはやはり限られた期間のことにすぎない。常時，先生と学生とが触れ合うという意味合いで，このゼミというかたちでの触れ合いが，私はやはり効果があったのではなかろうかなと思うのです。

それから教官の研究スタイルですけれども，私の場合は工学部から移ったということで実験講座に指定されていました。ですから予算が倍以上，その点，非常に恵まれていたと思います。私の場合，その予算は，いわゆる社会調査というか，実態調査のための費用というかたちになるのですが。

そういう意味で，機械や設備を介して研究する方式と，文科系の紙と鉛筆での研究では，やはり根本的には違う。しかし，ノーベル賞をもらった湯川（秀樹）博士などは理論物理ですから，紙と鉛筆だけで研究されたと聞いているのですけれども。

そういうことで，実験講座と一般の講座との違いというのは，本質的にどうしようもないかたちで，どちらがいいというのではない。むしろ私は，もっと広く言えば，やはり西欧中世の大学のようなかたちが必要ではないかとも思います。

それはどういうことかと言いますと，理屈一点張りのディスカッションというか，それは「虚学」と名付けていいと思うのです。そういう虚学と，現実の何に効くのかとか，何の役に立つのかという知識，いわゆる実学とは分離されていると。むしろ，これを接近させて，虚学と実学をインタラクティブなかたちに結びつけるのが必要ではないかと。

例えば，中世の大学は13世紀に花が咲くんでしょうけれども，それより少し前，大学は教室を持っていないし，講堂もない。つまりインビジブル・ユニバーシティー（見えない大学）。それは，飲み屋やレストランに相当する場所タベルナの上に教室をつくり，昼間はクールな実学で密度の濃い論議をして，夜は１階で酒を飲みながら虚学についてホットな議論をする。そういうクールとホットの循環ということが，私はやはり中世の大学のよさではなかったかなと思うのです。

そういう意味で，今後の大学のあり方も，何か一方的な，画一的なスタイルではなくて，むしろ対立するようなスタンスを統合する。分化ではなくて統合と。ディビジョンではなく，インテグレーションだと思うのです。

私としては理科系から文科系へ移り，その統合のチャンスを与えていただいたわけで，非常によかったなと思います。そういうことを学生諸君から言わせれば，私はやはり法学部の学生も工学部へ移るような，そういうチャンスが何かあってもいいのではないかと。もっと広く言えば，アメリカのロースクールのようなかたちで日本もチャレンジすべきではないかなと。つまり学部では理学部にいてコンピュータのことを詳しく勉強し，大学院でロースクールへ行って法律の勉強をすると。これがアメリカのスタイルだと思います。

例えば，サンフランシスコのシリコンバレーなどは弁護士をやっている連中が活躍していますけれども，彼らは学部ではメカニカルなテクノロジーの研究をしてきて，ロースクールで法曹の勉強をした。そして自分が扱うトラブルは，シリコンバレーのＲ＆Ｄの問題に関係しているということで，極めて働きがいがあるというか。

日本の場合，法律は知っているけれども機械のことはわかりませんということでは問題ではないか，そのためには相互交流というか，そういう学際的なかたちの制度化が必要ではないかと思います。

中尾　いまの先生のお話では，工学部から法学部へ移られて，法学部のよさと言いますか，従来はアウトプットという結果が求められたのに対して，法学部に移りますと，どのようにそういう結論になったかという手続き，あるいはその過程というものが非常に重要であると教えられたということで，非常にその点では幸運でもあり，学問のうえでも参考になったと。

学生との関係でも，法学部の場合はもともと少人数教育でゼミなどを重視していたわけですから，全教員がそれに携わるということで，非常に学生と教員とのアットホームな関係がつくられていたと。ただ難を言えば，工学部では卒験などがあったのに対して，法学部は卒論がないということで，そのへんの取り組みの違いがあった。

そして先生自身は，工学部という理系の立場と，法学部という文系の立場，その両方のいいところを生かして運用していくような学問を，今後進めていくという実感なり感想というのを，そのときに持たれたと。そういうお話であったかと思います。

大久保　そうですね。ちょっとお話しすれば，私は大阪大学の経済学部におられた森嶋通夫先生ですね，ロンドン大学へ移りましたけれども。この森嶋さんと梅田でお会いしたときに森嶋さんが言っていたことが非常に印象に残っているのです。つまりロンドン大学でのプロフェッサーシップは，複数の専門がないと手にすることができないということ。例えば，近代経済学の理論という専門と中世の会計制度についての専門とか。そういうことをおっしゃっていました。

つまり特定の専門だけでプロフェッサーシップを与えているということは，下手をすれば，専門ばかを許容することになりかねないと。そういうモノディシプリンの偏見を是正するためには，マルチディシプリンでなければいけないと。さらに言えば，インターディシプリンでなければいけないと。

そういうことで考えますと，やはり私は，いまの日本の大学教育には限界があるのではないかなと。先ほど申しましたアメリカの学部段階で理学部を出て，大学院でロースクールへ行くというような，そういう意味でのインターディシプリン形式というのは，もっと日本にも広げる必要があるのではないかなと森嶋先生のお話を聞いて感じました。

それから，ちょっと付け加えて言いますと，森嶋さんはもう一つ，ロンドン大学で石を投げれば必ず外国人に当たると言うのです。イギリス人に当たらない。つまりイギリス人より外国人のほうが多く，それはいかに国際的な大学の体制を大切にしているかということ。ところが日本は逆で，石を投げれば必ず日本人に当たる。外国人に対して一番冷酷であると。そういうことで，もっと国際化ということを僕は考えていいのではないかと思うのです。

法学部長としての取り組み

大久保　それから，先生からいただいた第３の問題として，法学部長に就任した時期の重要な取り組みについてどうかということがございましたね。この問題では，1986年度から民事法学専攻３コースと，公法学専攻４コースを導入したというようなことを書いておられますが，私はこれは法学部の継続的な発展のプロセスのひとコマであって，特段話題にすべき問題ではないような感じがします。

阪大の法学部というのは，ご承知のように，大学院は，最初は，民事法第一（民法第一）・民事法第二・民事法第三（民法第三）・民事法

第四（商法第一）・民事法第六（民事訴訟法）・法制史第一（西洋法制史）・法制史第二（日本法制史）および法理学の八講座を基礎とする民事法学専攻のみが設置されたが，1955年度には，憲法・行政法第一（行政法）・刑事法第一（刑法）・国際法および政治学の５講座を基礎とする公法学専攻が加えられ，その後逐次増加して，1986年現在，民事法学専攻14講座，公法学専攻10講座，合計24講座となっている。

1948年の法文学部創設当初に設置された講座は，憲法・民事法第一（民法第一）・民事法第四（商法第一）・刑事法第一（刑法）の４講座であったが，1949年度と1950年度に学年進行と並行して，民事法第二（民法第二）・民事法第六（民事訴訟法）・国際法・法制史第一（西洋法制史）および政治学の５講座が設けられ，引き続き民事法第三（民法第三）・行政法第一（行政法）・法制史第二（日本法制史）・法理学の４講座が設けられた。その後1958年４月に刑事法第二（刑事訴訟法），1963年４月に政治学第二（政治史）が，1965年４月に労働法が，1968年６月に商法第二が，1969年６月に行政学が，1970年４月に地方自治法・税法が，1976年５月に国際取引法が，1979年４月に国際行動論が，1981年４月に国際経済法が，1983年４月に比較法文化論が，1984年４月に国際民事訴訟法講座が設けられ，1986年現在で総計24講座が開設されている（以上カッコ内は1986年現在の名称）。

そういうことで，私が法学部長になったときの重要な取り組みかどうかはわかりませんけれども，まじめにやったのは，第三世界法政論という新設講座の要求をしたこと。つまり日本の場合は，アングロサクソンの英米法，それからドイツ・フランスの大陸法を学んできましたが，これからは世界的に見て第三世界の発展ということから考えると，それ以外の問題に目を向けるべきではないかと。特に中国との交流がさらに重要となり，明治以来の「脱亜入欧」ではなく，むしろ「脱欧入亜」というスタンスも，これからは重要になってくるだろうと。

特に経済交流の点で，聞くところによりますと中国の場合は，いわゆる契約という近代経済学の，あるいは自由な市場原理に基づく契約の自由というコンセプトが，日常的に活用されていない。むしろトラブルが起こると最終的には政治決着に付されるというようなことを聞きました。ですから，これから日本の企業がどんどん向こうへ工場を立地させ，あるいは資本を輸出させることが必要であるにもかかわらず，ちょっとしたことで政治決着するということではリスクが大きすぎる。

したがって何かそういうことをも問題にする，つまり法思想というか，法文化というか，そういう契約の自由に基づく原理を無視した問題の発生がどういうことから出てくるのか，そういうことで法の運用や，法社会学的な法観念などについて研究する必要があると。もっと広く言えば，中国だけではなく，将来，東北アジアの交流拠点である大阪ということから考えますと，大阪大学の法学部でこそ，第三世界法政論的なものは必要だろうというふうに，みなさんに考えていただいたわけです。

しかし文部省がそれを認めるかどうかが問題なので，私は突破する方法を考えました。それは大阪府知事に，こういう事由で新設講座をつくりたいと，これは大阪のためになるのだと。大阪の通商をアジアの拠点として発展させるには，これが必要だと関経連（関西経済連合会）の会長にも会いましたし，大阪工業会（現：大阪商工会議所）の会長，あるいは大阪商工会議所の会頭にも訴えて，関西経済同友会の幹事にも申し入れたわけです。そのように大阪地元の産官学連携というか，そういうかたちで各機関の長の判をもらい，それを文部省へ出したわけです。それはみごとに一発で決まりました。一発なんですよ。

ただ文部省は，まだ「第三世界」という言葉はアカデミックな感じでこなれていないと。鄧

小平がつくったかもしれないけれども一般化していないということで，「アジア法政論というかたちにしたらどうでっか」と言われて，「いやあ，それはけっこうですな」ということで，たちどころにオーケーになったわけです。それは何というか，産官学連携の威力です。

教育研究で印象深い出来事

大久保　それから，４番の問題に移っていいでしょうか。その在職期間中の研究教育で印象深い出来事など，在職14年間はどうなんだと。私が停年で辞めるときのリストを載せてもらっていますので，これでご覧いただいて。ろくなことをやっていませんけれども。

私は翻訳などにも手を出し，1981年からイギリスの都市・計画選書の５冊（『地域計画』『都市農村計画』『都市計画技法』『交通計画』『公共輸送計画』）や『環境影響評価報告書作成技法』などを翻訳や監修をしました。それから1989年には，いままでの機械的な都市論はだめだ，オーガニックな都市論でないとだめだということで『有機的都市論』を書いたということ。また最近では，５年ほど前に『都市論の脱構築』という本を書きました。

私に身に着きましたのは，先ほど申しましたように，いろんなことをやって実経験のなかで論理的な何かを導き出すというような経験主義的なスタンスですので，関西文化学術研究都市への介入というか，参加ということが，私にとっては非常に有利に展開したと思います。

しかも，京都大学の学園紛争のときに総長であった奥田東先生がチーフをされていた奥田懇談会で，奥田先生とじかに接触することができたのは非常に幸せであったと思います。とても大物というか，そんな感じがしました。つまりディテールを捨象して物事の本質をつかむというか，そういうことに非常に長けておられた。そういうことで奥田東先生に学ぶところがあったと思います。

そういうこととの関連から言いますと，ルーヴァン・カトリック大学というのがベルギーにあります。1450年にできた歴史的に古い大学で，ブリュッセルの約30キロ東にあったのですが，フラマン語とフランス語とのバイリンガルのトラブルで，結局，南へ30キロぐらいのところへ立地して新大学都市をつくった。そこには大学だけをつくるのではなく，計画人口５万人のルーヴァン・ラ・ヌーヴという大学都市をつくった。それはキャンパス計画として優れており，テーマは“town in the landscape（風景のなかの都市）”というのが彼らのプランニングとデザインのプリンシプルで素晴らしい大学をつくったのです。この計画は１ダースほどの国際的な賞をとっています。

そこへ僕は数回行きましたけれども，ブリュッセルから通勤電車を南へ30キロ引いてきて大学が終点になっているのですが，そのやり方は日本と同じなのです。運輸省にいくら言っても電車の軌道を引いてくれないから，私どもは先に駅をつくったのだと。そうしたら国も，やんごとなしに引いてくれたと言っていました。

しかも，そのやり方は地下３階にプラットホームをつくり，ホームの壁にはベルギーのポール・デルボーなどモダンアーティストの壁画が描いてある。もう美術館と一緒なのです。素晴らしいですよ。だいたい駅というと殺風景なものだけれども，ルーヴァンの最終駅は今申しましたように非常に立派な壁画のある駅なのです。その地下２階は高速の通過交通がスルーしていますし，地下１階は駐車場で，地上は歩行者天国。そして，そのホームの真上の地上に大学本部棟があるわけです。だから国際的な大学としては理想的なんですね。外国人にとってアクセスしやすい。

そういう大学を計画した人は，学研都市の奥田東先生的立場から言いますと，プロフェッ

サー・ミッシェル・ワットランという人です。この人と学研都市との関係で交際させてもらって，彼からもいろいろなことを教わったと。

それからもう一つ，いままでのインダストリアルパーク，工業団地ではなくてＲ＆Ｄでニューテクノロジーを生み出すような，そういうサイエンスパークやインテリジェントパークといったかたちでの模範例を示したのは，フランスでは，イルドフランス以外では地中海のニースのほうなのです。コートダジュール空港から高速道で20分ほどの所にあるバルボンヌ・ソフィア・アンティポリスというヨーロッパ最大のサイエンスパークをつくったパリ鉱山大学の学長ピエール・ラフィットがいます。その人とも学研都市を通じて交流することができたと。

これは京都の国際会議場で，サイエンスパークとは何かというサイエンスパークのコンセプトについて，国土庁の支援で，いわゆる新しい思想というか，それを導き出す理念や方法論を考えてやり出したのですけれども，そのときの国際シンポジウムがチャンスになって，世界から，ロシアからも学者を呼んでやったのですが，多くの人から学ぶことができたと思います。

特にロシアのモスクワ州立大学のプロフェッサー・ヴァディン・チコミロフなどは，エコポリスというコンセプトを発表されていました。そこで初めて聞いたのです，エコポリスというのは何ですかと。そうしましたら，あらゆる植物とか野鳥とか，昆虫や魚とか，その地域に生息している生物を悉皆調査して，それを保全する，いわゆるバイオダイバーシティー，生物多様性保全をおこなうということを手がけた都市がエコポリスなのだと。私はそこで初めてエコポリスという言葉を聞いて，それを自分で考えたような感じでほうぼうへ振りまいたのですけれども。

そういうことで，ろくな研究はしておりませんけれども，実践部門で学研都市その他，かなりやらせてもらった感じがします。そのせいか私は，関西文化学術研究都市推進機構の一つの機能として奥田懇談会を引き継いだ学術委員会ができたわけですが，その最初の副委員長を仰せつかり，しばらくして委員長にさせてもらったわけです。現在は，その顧問なのですが。そういうことで，学研都市からは非常に多くのものを学ぶことができたと。

日本都市計画学会の21世紀日本の都市計画ビジョン研究会というのがございまして，東京大学から慶應大学へ移った日端（康雄）教授が，私が豊中市政研究所の理事長をしていましたときに豊中の研究所まで来られて，今日のようなかたちで私が話すのを録音されて，それを都市計画学会の総会で発表してもらったと。また，都市計画学会の年次大会が東大の山上会館でありましたときに，私は功績賞をもらったわけです。その功績賞を見てみますと，「欧州の都市計画論を早くから紹介されると共に自らの思索を著書を始め数多くの論文を学会誌等に発表され，サイエンスシティ論，サスティナブルシティ論など時代をリードする先端的な理論提起を行った。」し，実際のプロジェクトにも関与して地域社会にも非常に貢献したということが書いてございました。少しほめすぎやと思いますが。

それから冒頭に申しあげましたように，私は行政学というサイエンスではなくて，行政論というかたち。しかも空間行政論というようなニュアンスですので，学会としても日本計画行政学会というのに所属したわけです。経済学の大家中山伊知郎さんや大来佐武郎さんらが作られた学会です。加藤寛さんも会長を務めました。この学会の副会長兼学術委員長を２期やらせてもらいました。そして，あとで少しお話しさせていただきますが，論説賞をいただいたわけです。

そして法学部長をしたという経歴から，数年前に瑞宝中綬章をもらいました。何かもらいす

ぎじゃないかなという気がするのですが。そして去年は豊中市長から感謝状をいただき，奈良県知事からも感謝状をいただきました。そういうことで少しは役に立ったのかなという感じがするのですが。

学内委員としての活動

大久保　それから５番目に学内の委員活動について書いてくださいましたが，これは『阪大NOW』という雑誌で取材を受けたときに少し話させてもらいました。

この将来計画懇談会や長期計画委員会がつくられましたね。当時，私は山村雄一総長に二つのことを進言したわけです。一つは，阪大には長期計画という言葉はあるけれども，言ってみれば文部省に対する予算要求で単年度計画というか，少なくとも数年計画のニュアンスしかないと。ですから，言葉の本当の意味での10年先，20年先，あるいは50年先，100年先を考えた長期計画が必要だと進言したわけです。

それからもう一つ，これも先ほど申しましたように，大阪大学が吹田へ移転するということで事業が進んでいたわけですが，吹田の市長に用地買収等で非常に世話になりました。ですから地元の市町村に対して恩義を感じて，やはり教育研究の成果を地元に還元するようなことを考えなければいけないと。その手始めとして，大阪府知事や関経連の会長など，そのような政界・財界のトップと会食をするというか，年２回でも３回でもいいので，そこでそれぞれ産官学の立場から地域の問題を話し合う必要があるということを進言したわけです。

そうしたら，山村雄一総長は早速それを取り上げてくれました。そして将来問題懇談会と長期計画委員会を立ち上げられた。これは僕が非常にうれしかったことです。そして，その成果として「地域に生き世界に伸びる」という素敵なスローガンを手にすることができたと思うのです。

私個人について申しあげますと，昭和55年の６月26日に「北摂における学術機能のあり方に関する研究委員」という辞令をもらったと。これはなぜかと言いますと，北摂で万博がおこなわれるし，循環器病センターや阪大が立地すると。ですから，あのへんに非常にたくさんの大学や研究機関が立地するという傾向が見えてきたわけです。

そういうことで，大阪府が北摂における学術機能のあり方について研究しようと研究委員会をつくるために，山村総長のほうへお願いに来られた。それで山村さんは，学内の教官を委員に任命したと。

その報告書は，バイオや情報系，国際系の学術研究センターを提言していますけれども，北摂における学術研究機能のあり方に対する調査報告書です。経済学部の建元（正弘）教授が座長をされて，あと十数人が委員になっていました。蛋白質研究所の泉（美治）教授，基礎工学部の藤澤（俊男）教授，それと私が幹事をさせてもらって，幹事が報告書を書いたわけです。のちほど，またご覧いただきたいと思いますけれども。

それから，昭和56年から57年の将来計画懇談会専門委員を58年まで。58年には名前が変わったんでしょうか，将来計画懇談会構成委員という辞令をもらいましたね。そして昭和59年には長期計画委員会委員。そうした長期計画に関する取り組みについて参加させていただいたと。

次に入学試験について，ご説明のように大阪大学の10学部は，毎年入れ替わって１次試験の世話をする学部が指定されるのですけれども，学部長が副委員長に任命されるわけなんです。委員長は総長で何もしない（笑）。副委員長は，ものすごく神経を使う。それが10年目かに回ってきて，そのときに僕は学部長をしていた。本当に不運でした（笑）。ということで，入試でもかなりしごかれたという感じがしますね。

それからキャンパス美化運動の問題。これは1987年ぐらいだったと思いますが，熊谷（信昭）総長の時分です。これも当時，公害を垂れ流す工場は緑化規定できれいになって見違えるようになったと。ところが工場より汚いのが阪大の石橋キャンパスだと（笑）。これではいかんということでキャンパスを美化しようと，待兼山庭園のところにはテニスコートが２面あったと思いますけれども，それを庭園にしたわけです。それをやらせてもらったと。

しかも，このときは，入口に大阪大学と書いた石が置いてありますが，32トンあるのを能勢から運んできた。また，上のほうに鉄砲杉がありますけれども，あれは京都の北山まで中岡（稔）先生なんかと一緒に買いに行ったんですよ。それから，入口から向かって左の下の方にある12本の形のいい黒松は岩根一正という方が寄付してくれました。そして右の方の中央にあります高い大きなケヤキは名誉教授会が寄贈してくれたわけです。この待兼山庭園が完成したのは1988年の３月です。

私はそれが初めての仕事ではなくて，先ほど言いました兵庫県社町役場の周辺で，いわゆる沈んだ庭，サンクンガーデン（沈床庭園）を設計した経験がございますので，こちらもそんなに苦労せずにやらせてもらったと思います。もちろん実施設計的な細かい図面は施設部がきちんとやってくれたと。

それから余談ですけれども，ここにある写真は僕がやった毛馬開門で土木学会賞をもらったらしいです。僕はもらっていないのですけれども（笑）。こういうふうに飛行機から見ると非常によくわかるのですけれども。これは１コマ10メーターずつなので，ものすごく巨大なものです。それで石のブロックと，サツキの植木を並べるブロックと。ですから飛行機から真下を見ますと非常にきれいに見えると思うのですけれども。そんな経験を踏まえて，石橋キャンパスの待兼山庭園をやらせてもらったのは，私にとって幸せであったなと思います。あと，皆さま方の評価はどうなのかと思うのですけれども。

菅　先生，少し話が戻るのですが，山村総長に長期計画が必要だとご進言なされたと。それは先生のほうからお申し出になったのですか。

大久保　そうなんです。これが報告書なんですが，この報告書は医学部の和田（博）さんが委員長でやられたわけです。私は委員としてはここに入っていませんが言い出しっぺなんですね。

中尾　先生は昭和54年から56年７月まで評議員をされているのですけれども，その関係で，そのときの総長が山村総長なのですか。

大久保　はい。これなんですよ。

中尾　この将来計画懇談会と長期計画委員会というのは，先生の進言に基づいてつくられたわけですね。

大久保　ええ，その二つを言ったわけではなくて，私は長期計画をつくることや地元の官財のトップとの懇談会をつくるべきだというふうに申しあげたわけですね。

中尾　その二つの進言をされる状況，その総長との関係というのは。その前に委員会のようなものがあったわけですか。評議員をされていて，先生に意見を求められるとか，そういう経緯というものが。

大久保　いやいや，私にオフィシャルに意見を求めたわけではなくて，長期計画と産官学連携の重要さを私が出しゃばって山村さんに進言したわけです。例えば知事との懇談会や関経連との懇談会をやれと言った。すると山村さんは早速，大阪の裁判所の裏の料理屋で，総長と知事と，21世紀協会事務局長の加藤さん，東大の法学部を出た方ですけれどもその加藤さんと，後に副知事になられた西村さんが企画室長でしたから，その彼らと僕とで会食をしたのです。

ですから山村さんは非常に行動力がありましたね。こちらが言って「ええな」と思ったら，

すぐに行動を起こしてくれた。それが長続きしたかどうかというのは問題ですけれども。

しかし長期計画委員会のほうはオフィシャルに辞令を発行して，教授を任命してやったわけですから，その和田委員会というのは非常に大きな功績をもたらしたと私は思います。

それから，もう一つキャンパス美化の問題に関して，当時，光ファイバー敷設の問題がありましたので，それを共同溝というかたちで，電線やガスや水道など全部をそこへ放り込んでやるという計画。これをやったことは非常によかったなと僕は思います。基礎工の藤澤さんが非常に熱心でしたね。だから豊中キャンパスは電柱なしです。それから浪高庭園の前の並木道がありますね。あれはシンボルロードとして僕が設計したんです。電柱は何もなしですね。そういうことができたのは非常によかったと思います。

それからもう一つは，各学部の用地，これは法学部の用地だ，文学部の用地だという仕切りがありませんでした。ですから将来拡張するときに，学部エゴイズムがぶつかり合う可能性がある。そういうことで，僕はこのときに各学部の周辺用地の管理責任というかたちでの申し合わせをしたように思います。用地の割り当て等についてもですね。

またもう一つ，この阪大には池がありましたので，私はやはり池は埋めるべきではないと。池というのは水たまりではなくて文化財なのだから，文化財を保全するのだということで申しあげたのですが，どうもキャンパスが狭くて埋めざるを得ないというかたちで，豊中市民病院のほうの池もやられてしまうし。石橋でも手前のほうの池は阪大の用地ではありませんから残ったわけですが。

そういうことで，当時，池を埋めるのは土地の有効利用という考え方で，むしろ良いことだと考えられていたわけですね。そういうなかで僕は早くから池は文化財だと警鐘を鳴らしたわけです。大阪府の南のほうにも丘陵地にたくさんあって，そういうことで池の保存を主張してきたのですけれども，豊中キャンパスの場合には，残念ながら埋めざるを得ないということだったのでしょうか。キャンパス美化関係に関しては，以上のようなことでございます。

社会貢献について

大久保　それから6番目は，社会貢献というようなテーマで書いておられますね。これも私は社会貢献というふうな高い立場ではなく，何回も申しあげますように，むしろ経験的な事実から理論化を試みるという都市論のスタンスから，私にとっては余分なことではなくて，必要な手段だったと思うのです。

先ほど兵庫県社町の嬉野学園都市の計画とか，関西学園都市の話を申しましたけれども，例えば，その文化というようなことでも，日本が考えている文化というコンセプトと，当時ヨーロッパ諸都市が考えている文化とでは，かなり違ったような感じがしたわけです。そういうことで文化というのは，やはり都市発展のエネルギーというか，そういうものではなかろうかなと。

そういうことで，ヨーロッパの文化都市調査というかたちでいろいろな都市を巡って勉強させてもらったのですけれども，例えばグラスゴーと大阪とを比べますと，初期の工業化で煙のもうもうと出る大阪は，非常にエネルギッシュで大阪の誇りであったと。公害という認識はなかったから。ですから，大阪はイギリスのグラスゴーだと言われたのですね。

ところが，そのグラスゴーは製鉄と造船といった非常に基礎的な産業で，ハイテク産業とはほど遠い感じだったと思います。ですから1940年代初期までは，「この製品はどこの製品でっか」「グラスゴーですねや」と言えば，「ああ，さよか。世界一でんな」と言われていたの

が，1970年代中ごろ以降には，「これがグラスゴーですねや」と言うと，「いや，最悪でんな」と言われる（笑）。そのように情報社会に向けて，グラスゴーの評価は変わったわけです。そして，これではいけないということでグラスゴーは頑張った。

1985年ぐらいでしたか，ギリシャの文化担当大臣である女性が，ヨーロッパの諸都市が集まって文化振興をやろうではないかという構想を発表したわけです。そして文化推進に貢献した都市を毎年表彰しようと。そういうことで，「ヨーロッパ文化都市」の称号を与える計画を進展させたわけですが，1985年の初年度は，ギリシャが言い出しっぺだからということでアテネが文化都市第１号でどうですかということでもらい，1990年代になってグラスゴーが文化都市の候補に入ってきたわけです。

僕はグラスゴーへ行って，文化担当部長に会っていろいろ聞いたのですけれども，非常に努力したんですよね。ですから，いままでグラスゴーは公害の暗いイメージ，それから建物も砂岩ですね。これは表面がざらざらしていますから，製鉄工場からもうもうと出る煙が当たって，どす黒くなっており，非常に陰惨な都市景観だったわけです。そういうグラスゴーの暗いイメージを払拭して，モダンなかたちにする。いろいろなことで努力して，いまやグラスゴーはヨーロッパ第一の文化都市になったわけです。こういう努力を，やはり大阪も，あるいは日本も取るべきではないかと。

つまり文化というのは，観光産業，あるいはファッションやデザイン産業とか，そういう意味合いでの文化もありますし，それからＩＴ関連の，いわゆる情報文化というかたちでの文化もあって，いろいろなスタイルがあります。しかも生活の質の向上という意味では不可欠な要素だと思います。例えば会社のリストラを進めることによる社会的なネガティブな影響というか，失業その他，そういうリストラによるマイナスの影響をプラスに転化させるファクターとして文化は機能すると。

文化というのは一義的なコンセプトではなく，多様なコンセプトを内包している。その多様なコンセプトを同時に，多発的に発現させる。これが都市の文化政策ではないかとやっていたわけです。具体的には，大阪府の文化懇談会というのができて，その座長を仰せつかった。それからもう一つは大阪土地問題懇談会というのができまして，その座長もさせてもらいました。

この土地問題というのは大阪だけではなくて，日本の都市政策のネックというか，無政府的なわけです。例えば，宇沢弘文東大名誉教授は日本政府の土地政策のアナーキーとモラルハザードについて，こっぴどく攻撃していますね。どう言っているかというと，「あらゆる日本の銀行は，暴力団または暴力団まがいの不動産業者を使って地上げに奔走した。そして大蔵省も金融自由化でそれをあおり，いわゆる金融専門知識を欠いたまま，土地を投機の対象として地価をあおり，その結果，土地バブルが崩壊して何十兆という巨額の赤字をつくりあげた。それを国民の血税である税金を金融秩序の回復というかたちで投入した。つまり非倫理的というモラルハザードだ」と。このように厳しく攻撃しています。「しかも阪神大震災の被災者，水俣病患者を無視し続けたまま」。

土地というのは本来，労働の所産ではなく，自然から与えられたものですから，自然資産というのは共通の資産として大事にすると。したがって公共の福祉に寄与するということを第一に掲げるべきであるにもかかわらず，投機の対象として大蔵省がそれをあおるという無政府主義。これを宇沢弘文さんが，こっぴどく批判したわけです。そういうことで，大阪府も土地問題懇談会を設置したけれども効果があったかどうかですね。

それからもう一つは，産官学の連携体として高度情報推進協議会というのがつくられまし

た。委員長が熊谷総長だったと思いますけれども，私は地域部会の部会長をさせてもらって，ここでいろいろなことをさせてもらいました。

また収用委員会というのがありまして，これは法学部の高田（敏）教授が収用委員をしておられましたが任期満了で辞めるということで，高田さんの後任として収用委員をさせてもらいました。２期ほど務めさせられたのですけれども。

それから和歌山県の基本構想審議会の副委員長，和歌山県の文化懇談会の座長とか，大阪通産局の工業団地計画，あるいは「農村地域工業等導入促進法」の成立に基づく地方の指導とか。だから方々へ行きました。そして吹田や豊中や箕面などの基本構想を策定したり，商業近代化の問題をやったりしていましたね。

もう一つ，アメニティというコンセプトを広めるのに役立ったのではないかなと思うのです。僕は公文書でアメニティというのを日本で最初に使ったのではないかなと。昭和42年ですけれども。

それは平城のニュータウンをつくるときに区域決定を建設省に申請するのですけれども，奈良市や奈良県を経由して出すのですね。すると僕の文書を見た奈良県や奈良市の役人が，「この仮名で書いたアメニティというのを漢字に直してください」と。辞書をひくと「快適性」というふうになりますが，そんなものとは違うんですよと。

このアメニティというのは，イギリスで長いあいだかかった歴史的な複合概念です。例えば19世紀中ごろからの改良主義運動，衛生，公共福祉，特にパブリックヘルスを確立するという運動がベースにありますし，さらに絵に描いたようなピクチャレスクな風景を大事にしようという運動もございます。また，ゴシック様式など古い歴史的な建造物を残す，保全するという運動。これらが合わさって出来上がったのがアメニティというコンセプトなのです。

そういうことで彼らにこんこんと説明して納得してもらい，公式文書にアメニティと書いた。そして建設省から許可の文書が来たのですけれども，「アメニティあるニュータウンをつくってください」と。建設省のほうが賢かったのかなという（笑）。

それから数年経って石原慎太郎が環境庁長官になったとき，環境庁内にアメニティ研究会というのをつくりました。それから，ようやく日本の社会にアメニティというコンセプトが広まっていったわけです。

以前，NHKがここへ来てくれて，「安らぎと生きがいのある社会へ」ということでアメニティの概念を話してくださいと，教育テレビで４回やらせてもらいました。それはNHKウィークエンドセミナー「人間らしさのあるまちから」というもので，７月13日の金曜日17時から40分間。一般聴衆がいたので，私の言うことに対してどうだったのかということで，これはNHKから送ってきた僕のスピーチに対する感想です。

ちょっと読ませてもらいますと，「大阪大学名誉教授大久保昌一先生の講義は，論理的にして平易で明解，実に歯切れのよいものであった。中世都市をモデルにしての21世紀の都市のアメニティづくりの提案は，まさにごもっともなことである。市民のための，市民による，市民の力で，神との一体感，自然との調和に基づく主体的な中世都市の都市づくりは，現代人の反省の重要な資料，材料にしなければならない」。そういうことで，まあまあ役に立ったのではないかなというふうに思うのですけれども。

それから読売テレビでは，フランスの都市計画を説明してくれということで弱ったなと思って，「僕はイギリスが専門なんです。フランスは弱いんです」と言うと，「いやいや，そんなことは言わんと」と。

フランスの都市計画を説明してくれと言うので，僕は「喫茶店かどこかに入って説明するの

かな」と言うと,「現地で説明してくれ」と言う。それで家へ帰って行動予定を調べると，私が都市づくりの海外モデル視察団の団長としてアメリカへ行く日にちと重なっていたので,「せっかくですけれどもアメリカへ行くことになっていまして」と言うと,「そんなこと言わんとアメリカのほうを断ってくれ」と。それで副団長をしていた東京の国鉄清算事業団の人に電話をして,「１週間遅れるから，１週間あんたが団長をしといてくれ。私はパリからそっちへ移るから」と言って（笑)。そういうことでパリへ行ったんです。

パリではテレビカメラを向こうの業者から借りて写したわけですね。そしてフランスの業者，そのカメラを運ぶ人もついて来ているわけですが，パリで「さあ先生，これからどちらへ行きますか」と言うから,「決まってるやないですか，凱旋門の上や」と言った（笑)。それで凱旋門の上の屋上までエレベーターで上がって，カメラを据えて,「何でここですか」と言うから,「カメラを360度回してごらん。一発でパリの計画がわかる」と言うと「なるほどなあ」と。ブールヴァールがずうっと集中していますから。

次に，ラデファンスの説明をしました。あの計画のおかげで，パリの歴史的な都心を残すことができたと思いますね。アメリカ的な高層ビルはパリの都心部では建てさせないで，ラデファンスでそれをやったわけですね。そういうことで，いわゆる第２凱旋門，新凱旋門というか，巨大なパブリックアートなどを。

それから次は，あのTGVで南へ下って地中海。先ほど言いましたバルボンヌ・ソフィア・アンティポリスを説明しようということで。それでニースをウォッチして，いかに観光地というか保養地であるにもかかわらず，看板一つないと。「日本とえらい違いでっしゃろ」と。やはり彼らは自然の美しさを大事にしようとしている。日本人は逆だと。

そしてヨーロッパ最大のサイエンスパークも説明しました。その後パリへ帰りまして，先に言いました視察団に合流すべくアメリカへ飛んだわけです。非常にいろいろなことをさせてもらいました。

それから韓国との関係につきましても，趙萬済という東大の法学部を出た方が会長をしている韓日交流協会でいろいろなことをさせてもらいました。例えば地方分権が法律化されるとき，ソウルのプレス会館で,「地方分権はいかに必要か」という講演を松島（諄吉）教授と一緒にさせてもらいました。

それから南に下がって大田（テジョン）というところに，筑波と同じような韓国の大徳（テドク）というサイエンスパークがあって，忠南（チュンナン）大学などの大学や研究機関が集約しているところがあるのですけれども，そこで講演をして，サイエンスパークづくりについてのレクチャーをさせてもらいました。

それから数年経って，ワールド・テクノポリス・アソシエーション主催の国際会議に招待されて韓国の大学で講演をさせてもらいました。そこでは，いままでサイエンスパークというのは地方にできましたけれども，これからは都市内部に，ビルトインされて集約されてくるだろうと。ですから，いままで目立つようなかたちであったサイエンスパークは見えなくなって，ビジブルなサイエンスパークからインビジブルなサイエンスパークへのシフトが起こるということを言いました。それは日本でも適応できると思うのです。

例えばイギリスから経済地理学の大家サー・ピーターホールという偉いロンドン大学教授が来ましたけれども，彼も私の意見に同調してくれたと思います。日本で地方のサイエンスパークは成功したように見えるけれども，成功したのは東京大都市圏50キロ以内のところにビルトインされたものであると。それがサイエンスパークの将来像というかたちで。

そういうことからか，趙萬済会長からは韓日

交流協会の顧問に推戴するという免状をもらいました。

また，奈良県の都市計画審議会の委員とか，去年までは会長をやらせてもらいましたね。それから先ほどもちょっと言いましたけれども，豊中市政研究所の理事長も創設から十年間去年までさせてもらい，財団法人大阪問題総合研究所の理事長もさせてもらって，現在は財団法人大阪地域振興調査会の会長をしています。

それから，ニュータウンの世界的なコミュニケーションをやろうということで，INTA（世界都市開発会議）というオランダに本部事務局がある機関があるのですけれども，そのINTAが毎年，国際会議をやっているので，私はその日本チームの代表として建設省の開発経済局の専門官などを連れて，例えばロンドン大学のエガム校や，ウィーン，エジプトのカイロ，リスボン，中国の深洲などで論文を発表させてもらいました。

このINTAが1991年４月に，イギリスのロンドン大学エガム校でセミナーを開催したとき，私は「日英第１号ニュータウンの比較」という報告をしましたが，オランダのスピーカーは「オランダの成長センター政策」というスピーチを行いました。成長センターというのは，イギリスのニュータウンと同じものです。彼は成長センターを開発すると，既存都市との間に自動車交通が増大し，CO_2を多量に発生し地球温暖化を進めるが，オランダは国土の大半が海面以下であるので，温暖化で海面が上昇することは最も忌避すべきことであり，1989年の国土計画で，今後は成長センター開発を中止し，これからの都市開発は持続可能な発展の枠組みの中に収め，コンパクト・シティを指向すると説明しました。その考え方は，都市化の方向が遠心力型から求心力型へとシフトし，少子高齢化で人口が減少するという縮小型への時代要請にフィットし，非常に説得力があったので，帰国直後に兵庫県知事と神戸市長にこのことを申し上げました。六甲周辺丘陵の開発と湾岸埋め立てを今後中止するよう進言しましたところ，市長は早速，それを市の開発行政に取り入れて，コンパクト・シティ指向を決定しました。ところが知事は宝塚の奥に1500ha以上の用地を保有しているので，この開発をやりたいとのことでした。そこで，開発の是非を審議する委員会を創ってもらい，開発を拒否しコンパクト・シティを指向するという結論を出しました。これは関西学研都市も同じですので，木津地区の一部と生駒第二地区の開発を中止するよう公団にお願いし，受け容れてもらいました。反対に大阪府は拡大型の都市政策を続けて大赤字を出し，企業局が潰れました。大阪市もベイエリアの開発を中止すべきであったのに継続して，不良資産を抱えることになりました。市・県・公団に対するこのコンパクト・シティ政策の進言は，自分で言うのもおこがましいですが社会貢献になったのではないかと思います。

それから大阪青年会議所の顧問をさせてもらいまして，インドネシアの国立バンドン教育大学で講演をさせてもらいました。エコノミー・エコロジー・アンド・エデュケーションという３Ｅというかたちで，環境行政は治療より予防が大切であることを，日本の経験を踏まえて説明いたしました。

講演させてもらったときに，大きな横幕を教壇の上に張って，日本の教授がこういうことを話していると。そして教壇の下に花の植木鉢をずらっと並べているのです。そして講演を終わるとパーティーがあると言うので，これは酒が飲めるなと思っていたのですが，お酒は一滴も出ないんです。がっかりしました（笑）。つまり仏教とは違う回教ですからお酒を禁止している。そういう経験がありました。

それから，アメリカのメリランド大学から1000ドルを送ってきて講演をさせてもらったことがあります。これは講演よりも，僕はメリランド大学のほうへ行ってキャンパスの絵を描い

て来たのですが，大阪大学とえらい違いやなと。もう見渡す限り地平線まで，ずっとキャンパスの敷地なのですね。いかにアメリカの大学というのは大きいかと。キャンパス型の大学というのはアメリカが発祥の地ですから，よさも悪さも，もちろんありますけれども。

メリランド大学だけではなくて，例えば南のオースチン大学などは石油基地がたくさんありますから，キャンパスのなかから石油が出てくるとか（笑）。豊中の場合は，掘ったら何が出るのかなと。ワニが出てきたというようなことは知りませんけれども（笑）。

そういうことで，かなりいろいろなことをさせてもらいましたが，それはそれなりに，私にとっては都市空間行政論の栄養にさせていただいたと思います。

大学をめぐる動向について

大久保　そうしましたら，７番目の大学をめぐる動向や大学の今後のあり方についてですけれども，国立大学の法人化以降のさまざまな改革について，どう考えるかというような。大学の改革というのは，私は非常に難しい問題だなと思います。僕は筑波大学ができたときに問題であったなと思いましたのは，東京教育大学が解体して筑波へ移転し，名前を筑波大学に変えて新設されたのですが，そのときの教授会というのは従来の大学自治となじまない形式になっていましたね。自治の問題について，やはり真剣に考える。大学の自治とは何かと。

中世の大学というのはご承知のように，いわゆる授業の方針とか学生と教師の関係，学位の授与，あるいはカリキュラム等の問題に関して，現在の大学制度につながるシステムですね。プラトンのアカデメイアの森なんかは大学と言われていますが，ほんとうは高等研究機関ではあっても大学ではないと言っていいと思います。そういう意味で，われわれのモデルにすべきは中世の大学だと。そこで最も重要なのは，結局は大学の自治だと。

大学の自治という場合には，単に勝手なことを教授会が決めるだけではなくて，大学のガバナビリティということが重要ではないかと。ところが，教官を集めた教授会に，果たしてガバナビリティがあるのかどうか。そこの問題で，いわゆる理論というか，理想と現実との乖離の問題があって，それをオーバーブリッジする仕掛けが必要ではないかなと思うのです。やはり大学の管理運営の健全化ということから考えますと，外部から第三者的な人が，中立公正な判断でもってアドバイスする委員会のようなものが必要ではないかという気もするのです。

それから，もう一つは教育の問題ですが，リベラル・エデュケーションということができているのかどうか。教養を非常に軽視している。つまり１年生から専門教課を教えるというかたちで教養部を廃止するといったこと。しかし，やはり人格形成という意味合いでの大学機能というのは，極めて重要ではないかと思うのです。リベラル・エデュケーション，つまり人格をビルディングする。教養というのはビルディングだと。ビルディングとしての教養教育，トータルパーソナリティの形成，これは軽視されるべきではないと思うのです。そういう意味で，あらためて教養教育と専門教育のバランスについて検討すべきではないかと思います。

それから大学人事のあり方ですが，これも問題ではないかと思うのですね。例の助手･講師･助教授・教授といった階層序列というのは，やはり若い助手にとってはマイナス的な過重が多いというか，研究者として教授と同じなんだという立場が大切。だから階層的な問題と，研究者としての平等性という意味合いでの調和をどうするのかということが，問題として残っていると思うんです。それからオーバードクターと，それとの関連での問題，基礎講座等に関する教官人事ですね。

それから工学部なんかの場合には，この開発した技術を起業化するというか。学園紛争のときには産学共同ということが攻撃の的にされたのですけれども，これからは大学だけではなくて，地域と共同して新しい技術を開発し，それを起業化していく。つまりアントレプレヌーリアル･ユニバーシティというコンセプトですね。企業大学というアントレプレヌーリアル・ユニバーシティとしての役割，そのための研究交流をしっかりすると。

例えば関西学研都市などでも，私は筑波が先発隊でしたから調査したのですけれども，筑波は反面教師でしたね。なんら勉強にならない。つまり国立43機関が移って筑波大学もできましたけれども，それぞれが各省庁の縦割りでばらばらなのです。研究交流は一切なし。これではいけないということで，関西学研都市は交流，リエゾンこそが使命だということで外国のモデル探しをしましたね。

その一つとして，パリ南部のイルドフランス。その地域はフランスのグランゼコールの６割，公立研究機関や試験所の４割ぐらいが集中していて，パリ・ヴァル・ドゥ・マルヌ大学やパリ南大学とか，たくさんの大学が立地しています。それから，ナポレオンがつくったエコール・ポリテクニークですね。

そういうことで，イルドフランス南部に研究者･大学･研究機関が集中しているわけですが，そこでは何をやっているかと言うと，科学都市と言うんでしょうか，研究交流促進のためシテ･シェンティフィックという財団をつくっているんです。そして，こんなに物理的に近接している研究者，研究所がお互いに研究交流をして，新しいクリエイティブな技術を開発すると。

その目的はいいのですが，実績は上がっていないですね。やはり個々の研究者というのは，たこつぼに入っている（笑）。ですから森嶋さんが言うようなモノディシプリンではなくてマルチディシプリン，学際的な研究者というのをつくっておけば，あるいはそういうことを要請すれば，リエゾンも自然に出てくると思うのです。したがって，これは非常にいい機関ですけれども，実績は将来に残されているという。

そういうことで，アメリカのシリコンバレーのスタンフォード大学はどうかと。これは1945年ぐらいでしたか，電気の教授がつくった研究所でスタンフォード・リサーチ・インターナショナル（SRIインターナショナル）というのがあります。これは数人で出発して，最初はスタンフォード大学のキャンパスのなかにあったのですけれども，学園紛争で外へ出て独立した。そして，いまや3200人ぐらいの研究機関に発達しています。

それから，もっと北のほうのオハイオ州コロンバスにバッテル・メモリアル・インスティチュートというのがあります。そこは世界最大級の研究所ですね。職員が7000人ほど，研究員がその３分の１ぐらいいる。世界最大というのはニューヨークのベル研究所ですが，ベル研究所はプライベートカンパニーで，SRIとかバッテル・メモリアル研究所はNPOなんです。

もう一つ，ノースカロライナ州にリサーチ・トライアングル・インスティチュートという研究所があります。三つの都市の真ん中で，チャペルヒルのノースカロライナ大学とか，ローレーのノースカロライナ大学とか，ダラムのデューク大学との研究交流拠点とすること。そういう仕組みのアメリカ最大のサイエンスパークがあるのですが，そこも調べさせてもらいました。

そこで言えることは，やはり組織理論というか，日本の場合は組織が問題だと。日本はピラミッド型の階層構成をしているのですね。部長がいて，課長がいて，係長がいて，課員がいる。僕はそういうことが，研究という非常に流動的な，同じ研究者としての平等性，能力，意欲，そういうものから，ちょっとかけ離れていると。

こういう階層構成も，やはり勤め人ですから

必要なわけですが，それを打破するシステムはないのかと見ましたところ，彼らはセミラテス型の構造，つまり階層構造と水平構造とのネットワーク型です。

例えば，ある人が課長としますと，上には部長，下には係長がいるのですけれども，研究プロジェクトごとにチーム編成をして，横のつながりで人事を展開するわけです。これが，やはり縦割りの閉鎖性を打破する役割を果たすことですよと。

それからもう一つ，人事面でよかったと思いますのは，日本では悪い係長の下では一生うだつが上がらんと言われますけれども，結局，人事は「私はこういう業績があるんです」と自己申告し，次にピラミッドの上役が評価する。そしてもう一つ，そのプロジェクトリーダーが評価する。この三つの評価視点によって，人事の公平性が担保できるというふうに私は思うのですね。

その研究交流の促進という意味と，人事の公平性という意味で，このネットワーク型，セミラテス型の組織編成が非常にいいのではないかなと思いました。しかし日本はなかなかそうはいかない。日本は非常に官僚機構的な上下が，ピラミッド型に固まっていると。

大学の今後の改革のあり方みたいなものが問題にされておりますので，これをちょっと見ていただきたいと思うのですけれども。

最初にコミュニバーシティーというものをご説明したいと思います。山村総長に地元への社会還元をしろというように申しあげた。あれがその一つですけど，つまり次のような二つの機能を大学として持つ，そのような大学もあっていいのではないかなと思うのです。

第一の機能は生涯学習ということ。若い学生だけを相手にするのではなくて，一生勉強なのだ，死ぬまで勉強だという意味合いで，社会人に対して開かれた大学，生涯学習のセンターなのだということ。第二の機能は，地元の課題を一緒に考えてこなす，研究開発をするということ。そういう二つの役割を持った大学を，僕はコミュニバーシティーというふうに名付けたわけです。

大阪大学がというのではなくて，これからの社会には，そういう大学がいくつかあっていいのではないかなと。もちろん，これはアメリカのコミュニティー・カレッジとは性格が違います。アメリカのコミュニティー・カレッジというのは，いわゆる短期大学のようなかたちで教育しかしない。やはり研究教育というのが大学の大切な機能で，そういう意味では，アメリカのコミュニティー・カレッジとは違うと。

アメリカでは，都市問題研究所を非常にたくさんつくっているのですね。大きな大学は，ほとんど都市問題研究所を持っているわけです。だから大学というのは地域社会に貢献するのだと，地域の問題を自分の問題として取り組むのだという役割認識を持っている。しかし日本の大学には，こういうものはない。ですから広く言えば，地域課題をこなすというような大きな役割を持った大学が必要ではないかということです。

もう一つは，このタウンとガウンの融合というペーパーがございますが，例えば梅田の貨物ヤード跡に，何か大学院の連携したようなものができないかとか，あるいは懐徳堂のような役割を担ったものが考えられていいのではないかというような意見もございます。

イギリスのオックスフォード大学やケンブリッジ大学などは，古い中世時代の伝統を持つ大学ですが，非常にまちと解け合っている。つまりカレッジなくしてはオクスフォードと言えない，ケンブリッジと言えないと。そして，これらは小型で，キャンパスとは言えないような敷地のスタイルで，先ほど言いましたアメリカの広大なキャンパス型の大学とは異なるタウンとガウンとが融合できるようなスタイル。そういうものこそ，私は現在の大阪など大都市の都

心部に必要ではないかなと思うのです。

しかも大学は，何回も申しあげていますように，中世のスタイルから言いますと，インビジブルなユニバーシティーであっていいと。つまり研究意欲に燃えた人材がいるということが大学なので，大きな施設があるとか，大きな教室があるとか，そんなことは関係ないと。夏は梅田にいたけれども，秋は難波のほうに行ったというようなモビール大学でもいい。それはいろいろな形態があり得ると思うんですけれども。

そういうことで，例えば研究と教育を統合するような仕掛け。前に虚学と実学との統合というようなことを言いましたけれども，そのようなかたちで考えることと実際にすることが，大きな研究機関や研究施設とは関係なしに，これからは大都市の都心部にだんだんと必要になってくるのではないかなと思うのです。サイエンスパークはインビジブルになったと申しあげましたけれども，そういう意味で，新しい技術開発が都心部のいろいろなところに埋め込まれている。そういうかたちでのタウンとガウンとの融合。

それから，もう一つのペーパーですが，大学改革の方向。僕は昔から，大学には研究，教育，社会奉仕という三つの機能が必要であると言われているのですが，それにプラスして，クリティシズム（批判）が大きい機能ではないかなと。この批判というのは，人類益を無視するような，つまり人類正義に逆らうような国家の姿勢，あるいは社会のスタンスに対して厳しく批判するということと，同時に厳しく自己を批判する自己批判の精神を持つということ。この教育，研究，社会奉仕に，四番目の批判という新しい機能をぶち込むべきではないかなと思うのです。

例えば，20世紀は大量殺戮の世紀であったと言われていますね。１億数千万人の人が殺された，人類史始まって以来のむごたらしい殺人がおこなわれたホロコーストの時代です。そういう時代に大学は，何ら抵抗することがなかった。ナチス・ドイツのケースについてもそうですし，日本軍国主義に対してもそうですね。それではいかんと。

大学は，単に知識を生み出す，クリエートするというだけではなくて，その知識が人類の幸せに役立つ，人類益に寄与するということ。人類益への持続的な寄与こそが，大学の使命ではないかと思います。そういう意味で，こまごましたテクニカルな改革論議よりも，もっと根本としての大学の存在，プレゼンス，それを世の中に示すべきではないかと思って書いたペーパーがそれなんです（「大学改革について－文明論的素描」『計画行政』25－４，2002年）。すると，これに対して計画行政学会が論説賞をくれた。

そういうことで，その方向として，例えばマックス・ヴェーバーは「科学は価値自由である」と言っています。たしかに科学は価値自由ですけれども，やはりそれが環境破壊とか，いろいろな現代文明のシンドロームを生み出してきた。したがって，ギリシャ時代と同じように哲学と科学が統合されていることが重要で，これからの大学は哲学と科学の統合を一つの目標にして，平和主義をかたちづくり，平和・人権・民主主義を理念として現代文明のシンドロームに，サスティナブルにチャレンジすべきではないかと思うのです。

そのためには研究心一般のヒューマン・ウオンツ（人間の欲求）という問題をフィルタリングする倫理が必要だと思います。つまり知識のアセスメントですね。これは原子力発電の問題，原子爆弾の問題だけではなく，生命工学，バイオサイエンスの問題にも将来関わってくると思います。したがって，本当に開発を進めていい研究なのかどうかをチェックする，研究と哲学をおこなうような，そういう科学と哲学との統合。

歴史につきましても，いままで私たちは歴史と言うと，何か悲観史観とか，楽観的な史観と

か，マルクスのような科学的史観とかいろいろありますが，それはすべて与件としての歴史を考えているのです。つまり外的条件として。

これではだめで，現代文明の人類を破滅させるような大きなシンドロームがあるわけですから，これを解決するために，われわれはカール・ポッパーが言うように，よりよき未来は選択可能だという立場に立って，革命を起こすのではなく，ステップ・バイ・ステップで一歩一歩前進するというスタンスが必要であろうと思います。つまり主体的な歴史観に立って歴史創造に参加するということ。こういう認識が必要だと思います。

歴史の教育でも，強い歴史と弱い歴史というコンセプトがあります。例えば人類史というのは強い歴史ですが，それに対して世界史とか近現代史というのは弱い歴史というか。われわれが未来を正しく照射するという姿勢で歴史を学ぶとすれば，やはり複眼的な歴史レンズを使うと。

つまり500万年前の人類の誕生という人類革命，それから１万年前の農業革命，Ｂ.Ｃ.3500年ぐらいからの都市革命，Ｂ.Ｃ.８世紀からＢ.Ｃ.４世紀にかけての精神革命，17世紀の科学革命，1760年代からの産業革命，戦後の情報革命を経て現在に来ていると思いますが，その非常に波長の長い歴史からの考察ということ。それから世界史的な，せいぜい紀元前数世紀というギリシャ，ローマ以降の世界史的な波長の流れ。また近現代史というか，19世紀，20世紀といったような現代的なところへ踏み込んでいく，少なくともルネサンス以降，宗教革命以降という波長の短い流れ。そういう三つの波長の異なる歴史の照射によって，われわれは現在という時点に立って将来を照らす。

そのような，いわゆる文明史的な観点からの歴史観というものも，私はこれからますます必要になってくるのではないかなと思います。だから単に，西洋史や日本史というかたちで，一つの波長に基づく歴史教育というのは問題ではないかなと思うのです。

そういうことも含めて未来を照射することによって，現代文明の深刻なシンドローム，これはあらためて言うまでもないと思いますけれども，一つは生態系の破壊，それから南北格差の拡大，資本主義的価値体系によって絡め取られた人間的な価値の喪失というか，人間精神の空洞化。当然，それが地域共同体の崩壊ということを引き起こしていると思うのです。

そのような深刻な問題に対して，生態系を回復し，南北格差を解消して人権にふさわしい，人間の尊厳にふさわしい生活を担保するような世界をつくりあげると同時に，破壊されたわれわれの魂を救済する。そしてローマ法王が21世紀は国家の時代から個人の時代へシフトすると言われておりますが，さらに個人から人間とのつながり，つまり共生というか，人と人との共生，人と他者との共生，異者との共生，これは多文化共生，文化の異なる人との共生，自然との共生，そして先ほど言った歴史観というのは歴史との共生。そういう新しい次元の共生を，われわれは手にする努力が必要ではないかと。

そういうことで，今後の大学のありようは，その改革の中核に，知の中核になるべきだと思うのですが。手前勝手かもしれませんけれども。

適塾について

大久保　次に，適塾の活動との関係ということですけれども，僕は1974年に適塾管理運営委員会専門委員を任命するという辞令をもらい，それ以来，現在まで35年間，適塾に関係してきたと言っていいと思います。ちょっと読みあげますと，適塾管理運営委員会専門委員とか，適塾管理運営委員会適塾保全計画推進専門委員会委員，適塾管理運営委員会適塾改修調査専門委員会など，いろいろな名前の変わった適塾関係の辞令があるのですが，そういうことで現在まで

35年間関係しました。

それと，へたくそですけれども，機関誌『適塾』の表紙を第19号（1986年）から現在の第40号まで，続けて描かせてもらっているということです。また，第12号では「イギリスの町並み保全」について42頁の長文をのせていただきました。適塾の夕では「都市計画のパラダイムシフト」について講演させてもらいました。それから皆さんがご指摘のように，適塾記念会50周年記念の祝賀会で適塾の教育方法について講演をさせてもらいましたし，大阪ブランドコミッティのなかでのレクチャーもさせてもらう。

それは「科学的思考法とヒューマニズム」という。適塾の魅力というのは，言ってみれば，この科学的な思考法“scientific way of thinking”であり，これはやはり幕末・明治初期の時代の人には魅力だったと思います。つまり儒教や仏教というような東洋的な考え方に対して，いわゆる西洋合理主義，理性，悟性に基づく科学的合理主義を展開する。この科学的思考法が塾生にとっては非常に魅力だったと思います。

そして，もう一つの魅力は緒方洪庵の人格というか，彼のヒューマニズムの魅力であったと思います。もっと言えば，ギリシャ時代の医学，ヒポクラテスの「医は仁術だ」という考え方ですね。つまり医の精神は患者本意に，患者に仕えるのだということが適塾の精神となって形成されてきたと思います。

それから，蘭学塾という意味合いで，洪庵自身の教師としての能力が非常に優れていたと思います。長崎でオランダ商館長ニーマンから直接学ぶことができたし，江戸も蘭学のセンターであったと思いますが，坪井信道や宇田川榛斉に学びました。そして大坂は蘭学の第三のセンターであったと思いますが，中天遊に学ぶことができた。ですから，長崎と江戸と大坂という三つの蘭学センターのエキスを，洪庵という一人の人格のなかに統合することができたというのが幸いしたと思うのです。そういう意味で，後に洪庵は江戸の奥医師として，日本最高の医者として招聘されたのだと思います。

適塾は蘭医養成所ではなく，科学的思考法を伝授する教育機関であった。例えば適塾出身者を見てみますと，医者だけではなくて，橋本左内なんかは福井の藩政改革をやっていますし，大村益次郎は近代兵制の創始者。冒頭に申しあげました，僕が嬉野学園都市を計画しました加東郡社町から出てきている村上代三郎も塾頭をした人ですが，彼もやはり砲台設計なんかをやっていますね。それから大鳥圭介なんかも工部大学校校長兼学習院院長，特命全権公使，朝鮮国駐在公使などをしております。

また福沢諭吉は慶應義塾大学を創設していますし，武田斐三郎は洋式五稜郭設計，花房義質は農務省次官あるいは枢密院顧問官，日本赤十字社社長などをしています。佐野常民は海軍創設，元老院審議官，大蔵卿とかというようなことで，医者だけではないですね。いろいろな能力ある専門家をつくりあげています。

そういう意味で，適塾というのは科学的な考え方をやったという魅力があったのではないかなと思いますし，洪庵もそういう姿勢で臨んだのではないかと思います。つまり蘭学塾だけれども医者だけを養成するのと違うぞと。兵学家も砲術家もいるし，草本家もいるし，いわゆる舎密家（化学者）もいる。そして蘭学を志す人は，みんなこの塾に入ったということです。

しかも福沢諭吉が言っていますように，「学問・勉強ということになっては，当時，世の中に緒方塾生の右に出るものはなかろう」と。これだけ自信を持って言えるということ。「江戸にいた書生が，おりから大坂に来て学ぶものはあったけれども，大坂から，わざわざ江戸に学びに行くというものはない。行けば必ず教えるというほうであった」とかね。

そういうことで，緒方洪庵自身が示している科学的思考法とヒューマニズムということ。もう一つは，八重夫人のホスピタリティーも大き

いと思います。ですから適塾の魅力というのは，師匠である洪庵の優れた人間性と科学的思考，八重夫人のホスピタリティー，そこで展開された優れた教育システム，つまり成績主義というかたち。そして大坂北浜という，いわゆる商業都市のメッカ。そういう勉学に適した立地条件などが，僕は効いていたのではないかと思うんです。

阪大生へのメッセージ

大久保　最後ですが，学生へのメッセージです。僕は学生へのメッセージを言うような高い立場にいないので，むしろメッセージが欲しいなと思うのですけれども，あえて言うならば，やはり楽しむということが必要ではないかなと。知識を楽しむというか。芸術というのは，楽しむ学だと思います。芸術は楽しむけれども，他の学問に対しては苦しみを感じるような常識が蔓延しているので，ちょっとおかしいと。芸術であれ，学問であれ，すべてエンジョイする対象なのだと思います。

例えば小学校でも，児童・生徒が学校が嫌いになると言っているんですね。これが最大の問題だと思うんです。学校が好きでかなわんと，もう時間がある限り学校におりたいというようなことでないと困ると思います。

先ほど先生もおっしゃった宇沢弘文さんは，教科書などの問題で文部省の検閲とトラブルがあったと。彼は数学の教科書に関与したらしいけれども，宇沢さんが見た感じでは，まるで数学を嫌いにさせるような数学の教科書だと書いています。ここが僕は問題だと思うんです。やはり数学を好きになるような，英語が好きになるような。

教育というのは，ドイツ語で「引き出す」というエルツィーエン（erziehen）という動詞の名詞形でエルツィーフンク（Erziehung）と。つまり引き出すことなんですね。神さまから与えられた潜在的な能力を引き出すことをお手伝いするということで，エルツィーヘンと言う。これが引き出す，育てるということ。

ところが日本の教育は逆で「詰め込む」と言う。レディーメイドな情報を詰め込むということで，アインパウケン（einpauken）。だから口の悪いドイツ人は「現在の教育システムは剥製業者である」と言ったんです。つまり大切な内臓を全部取り出して，綿を詰め込んでいると（笑）。「緩慢な殺人行為である」と言っている。これでは困ります。

例えば私は絵が好きなのですけれども，小学校のときには，みんな絵が好きだと思うんです。ところが学校の先生がだめにしてしまう。おまえの絵はめちゃくちゃやとか何とか，自分の間違った観念やまずいセンスで図画を指導するから，みんな「やんぺ」と嫌いになったんだと思います。そういう意味で，僕は常に明るく知識を楽しむというスタンスが必要だと。札幌農学校の学生にクラーク博士が「Boys, be ambitious!」ということを言われましたけれども，私は，やはりボーイは楽しくというふうにすべきではないかなと。

それから重なるようですけれども，森嶋先生が言われたように，複数のディシプリンを身につけることを考えていただきたいと。会社に就職しましても，ゆとりのできたときには，もう一度大学へ来て，大学院で異なる専門を勉強するといったようなこと。複数の専門を持つことによって，単数のディシプリンしかない人たちの社会的な偏見を排除することができる。モノディシプリンからマルチディシプリンへ，さらにインターディシプリンへ発展させる。そうすれば，他の専門領域に対する理解を示すこともできると思うんです。これが生涯教育，生涯学習との兼ね合いで必要ではないかと思います。

やはり都市が発展するというのは，人や情報や金がアグリゲートする，集積するというアグロメレーションが都市の発展のエネルギーに

なっていると思いますが，単に人・もの・情報・資本が集積するだけ，画一的な要素が集積をするだけではだめだと。異質性，多様性，そういうホモジニアスではないヘテロジニアスなものの集積こそが，都市発展のエネルギーになるというふうに思います。ですから，学生諸君も都市の発展を自己の発展と考えて，個性の伸長という,「俺は人とはちゃうで」という個性の発揚，そのことによってセルフアクチュアリゼーション（自己実現）を果たすという。

それから，最後に卒業して「はい，さよなら」ではなくて，阪大出身者は死ぬまで大学との関係を維持することが必要ではないかと思います。単に同窓会的なものだけではなく，そのような仕組みを，ぜひつくっていただきたい。

以上，先生からいただいたご質問状にお答えできたかどうかわかりませんけれども，今日はお忙しいのに，わざわざおいでいただいてありがとうございました。文章には自宅でもいいと書いてございましたので，えらいすみませんでした。ありがとうございます。

中尾　いえ。本当にいろいろなお話をお聞きできましてありがとうございました。

いま私たちは，ご存じのように，大学のいろいろな改革のなかで，人によっては多忙な時期で，その場その場で考えざるを得ないような状況です。そのなかで先生のお話は，非常に長期的な観点，あるいは歴史的な観点も含めて，それを比較的な観点からもお話されながら，大学あるいはそのなかで学ぶ者がどういう能力なり，いろいろな見方ができるような者を養成するために，どういうことが必要なのかなどを含めてお聞かせいただきました。

また最後のお話のなかでは，大学というのは楽しむ場であり，もっとも人間が生きていくうえで活力になるのは，あるいは生きる力になるのは楽しむことであるというお話で，私自身いろいろ教えられるものが多々あったように思います。

今日お話をお聞きするにあたって，先生には事前にいろいろと準備までしていただきまして，本当にありがとうございました。

大久保　いえいえ，どうもすみませんでした。

阪大の吹田移転について

菅　長時間にわたってお話をうかがった後で恐縮なのですけれども，１点おうかがいしたいことがございます。阪大自体が中之島とか東野田とか，大阪市を離れて吹田に移転したわけですけれども，この吹田への移転を先生はどのように評価なされているのでしょうか。

大久保　そうですね。これは先ほども申しましたように，日本の大学がアメリカのようなキャンパス型の大学になったと。つまりオックスフォードやケンブリッジのようなカレッジ型の大学ではなくて，ずうたいの大きいキャンパス型の大学になったと。ですから都市の内部では拡張ができないというか，将来性が約束できない。そういうフィジカルな制約を排除するためには移らざるを得ないということだったと思います。

ですから山村総長にも私は申しあげたのですけれども，タウンとガウンの融合でお話ししましたように，やはり中世の大学は都心にいてこそ存在意義を持ち得たと。この思想というかスタイルは現在でもなくしていいわけではないので，将来，考えるべきではないかと。

例えば中之島センターをつくっておられますけれども，私はこれをもっと，いわゆるカレッジ型の大学のようなかたちの知のセンターにすべきではないかと思いますし，中之島センターだけではなく，先ほど言いましたように梅田貨物ヤードへ懐徳堂の現代版をつくりあげるとか，ある意味でバイオのセンターをつくるということだってあると思います。

一方，送り出した大阪について言えば，つまり大阪市大も南のほうへ大学を全部追い出して

しまった。これは僕は問題ではないかと思うのです。追い出す必然性はあったのですが，追い出したあとを放っておくという必然性はなかったと思います。

例えば，工業化が進んだ1960年代，「税金を安くします。土地を安くします」という工業誘致条例などで工業を誘致した。ところが，そのあとに大学誘致の波がきたわけです。国土庁には大学ライブラリーができて，269市，161町，15村，合計445の自治体が登録し，もし移転する大学があれば，ぜひ私のところへちょうだいしたいとやったわけです。ですから，高度情報社会，高度技術社会という意味では，大学が活性化の活力源になり得るということだと思います。

大都市内部での大学の拡張が不可能だから，キャンパス型の大学は出て行かざるを得なかったということですが，大学が都市内でタウンとガウンの調和が図れるような種類の大学院大学を，多様な大学院大学をターミナルなどの便利なところにつくる。大都市内における多様な都市的刺激が得られるクリエーティブ・アイデアが，私はやはりタウンとガウンという関係，都市と大学とのギブ・アンド・テークの関係を促進すると思います。そしてユニバーシティー・インテンションと，ユニバーシティー・エクステンションを拡大することによって，あらゆるセクターの大学へのアクセスを支援すると同時に，逆に大学が，あらゆるセクターに対してアプローチするような双方向のアクセスを，制度的につくりあげるべきではないかなと思うのです。

ですから，キャンパス型の大学が出て行ったまま放ったらかした大阪市というのは，僕は怠慢であると思います。出て行かざるを得なかったという必然性は認めますけれども，それだけで放っておいたというのは問題で，キャンパス型ではないカレッジ型，あるいはインビジブル・ユニバーシティーなど，私は多様な大学陣をつくるべきではないかなと思うのです。

新しい都心型の大学院を構想して大型予算をつけろと，中央や地方の政府にお願いしたいですね。

菅　どうもありがとうございました。

大久保昌一名誉教授略歴

1926年８月　三重県に生まれる
1953年３月　大阪大学工学部構築工学科卒業
1969年６月　大阪大学助教授工学部
1976年４月　大阪大学教授法学部
1979年８月　大阪大学評議員（1981年３月まで）
1985年４月　大阪大学法学部長（1987年３月まで）
1990年３月　大阪大学停年退官
1990年４月　大阪大学名誉教授

Memoir of Osaka University Talked by Emeritus Professor Masakazu Okubo

Toshimitsu Nakao, Masaki Kan and Takeshi Abe

This is a record of the talk of Emeritus Professor Masakazu Okubo related to the history of Osaka University. Professor Okubo, who had conducted research on architectural engineering as an associate professor at the Faculty of Engineering of Osaka University, was invited as a professor of public administration by the Faculty of Law in the same university in April 1976. Professor Okubo energetically promoted to make physical master plans of such new towns as Senri in Osaka Prefecture, Yashiro in Hyogo Prefecture and so on, while he scrutinized many foreign cases of spatial planning. Supported by such rich knowledge and experience, he greatly contributed to beautifully arranging the environment of Osaka University. During the period from April 1985 till March 1987, as Dean, Professor Okubo succeeded in setting up a new chair, Law and Political Science about the Third World, at the Faculty of Law. He also insisted on the importance of the collaboration between the local society and Osaka University, which was well accepted by the authorities of Osaka University. Adding to them, Professor Okubo recalled *tekijyuku,* the protection of which he earnestly proceeded.